



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく : 第1報 いちゃんへのインタビューから
Author(s)	松田, 康子
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 2, 67-90
Issue Date	2019-03-28
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.2.67
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74915
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Matsuda.pdf



「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を
多様性にひらく
—第1報 にいちゃんへのインタビューから—

松田 康子*

Open the Diversity “What is a Survivor's History to People
Who has Experienced Mental Health Issues, Trauma,
and Extreme States”
-First Report: an Interview of Niichan-

Yasuko MATSUDA

要旨

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものである。本研究は、精神障害を生き抜く“にいちゃん”の生きられた経験に学ぶ事例報告である。方法は、非構造化面接を用いるインタビュー調査である。本研究は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。分析の結果、“他者のまなざしに自身の病いを見る”、“こんなにちは”に答えること、“いつの間にか”、“おかげさま”、“ひたすらしょうがなしに「待つ」”—以上、5つの生きられた経験の意味が見出された。

キーワード：多様性 精神障害 生き抜く 質的研究

Key words : Diversity ; Mental health issues, trauma, extreme states ; Survival ;
Qualitative research

1. はじめに

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものである。調査は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。

本研究の問題意識は、拙著にてすでに記した（松田 2018）。

筆者は、精神障害者当事者を対象とする質的研究をレビューした結果、精神障害者が地域で暮らし続ける物語のモデルストーリーが共通して見出されていることへの疑念を述べ、モデルストーリー化した物語が、多様さを認め難くさせ、包摂どころか、条件を満たさないものの排除を招きかねない問題を指摘した。質的データを収集し分析することの強みは、むしろ多様さの発見にある。精神障害者当事者を対象とする質的な研究は、今一度、「多様性を認める」という原点に立ち戻り、存在するとみなしてきたものを今一度問い返していくような、事実の集積を行い、「これは何か？」と素朴に問い、発見していく作業に戻る事が求められていると述べ

* 北海道大学大学院教育学研究院 教授

た。かつて、障害受容段階説への反駁から試みた拙著（葛西 2006）でも、精神障害当事者への聴きとり調査から〈和解〉、〈所有〉、〈日常化〉、〈悪循環〉という生きられた経験の軌跡を見出したが、精神障害者へのケアリングを論じるにあたり、成長の意味を曖昧なままに、自身の成長に向かって主体的に人生を「生き抜いて」いくモデルを前提としていたことは否めなかった。最後に、筆者は近著（松田 2018）において、多様さを認め合う社会の創出が求められていく社会の変化が期待される現在であるからこそ、やはりモデルストーリーから脱却した多様さにひらかれたストーリー、事実の集積が新たに求められていることを提起した。

こうした問題意識により、何より、一人一人の物語を丁寧に扱うことを志すものであるがゆえに、本論文では、インタビューという方法を用いた一事例報告という形をここで試みることにした。

2. インタビュー調査概要

2.1. インタビュー調査の目的と方法

繰り返しになるが、インタビュー調査の目的は、「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」という問いに基づき、地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探索することと設定した。図1の調査協力依頼文書には、ひとり一人のインタビューが語る生きられた経験、生きざまの実態から、ケアの視点を学ぼうとしている研究であることが記してある。

インタビュー方法は、文書にあるテーマと「暮らしの中で、関わりの中で病気を意識する（させられるとき）、しないときについて、自由にお話をしていただきたい」と投げかける以外は、その場の流れ次第でインタビューが展開する非構造化面接であり、今回インタビュー調査に応じてくださったにいちちゃん（仮名）との面接は2回にわたって合計約2時間行われた。

様（当事者・関係者）
調査協力のおねい

この度は、「精神障害を生き抜くとはいかなることか」という研究にご協力をお願い申し上げます。たくご挨拶とご説明をさせていただきたいと思ひます。宜しくおねい致します。

1. 研究の目的について

本研究は、「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」という問いに基づいています。精神障害を抱える当事者が、地域で己の人生を生き抜こうとするその正のりから、周囲の人々・当事者にとつての課題と展望を見出したいと考えています。

地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探索することが、具体的な研究目的です。意識とはそのバリアの一端でありますが、理解の一端でもあります。当事者にとって、周囲の人々にとって、両者にとって、それぞれの立場によって生きられた経験は様々だと考えます。一体どんな経験が病気や障害を意識させ、または意識させられバリアとなり当事者を生きにくくさせているのでしょうか、どのような意識（理解）・雰囲気（文化）であれば生きやすくなるのでしょうか。普段は病気や障害を意識すらなく生きていることもあるのではないのでしょうか。個別具体的な生きられた経験から学んでいきたいと考えています。

本研究の意義は、長期入院を解消し、精神障害を抱える人が、地域であたりまえに暮らし続けたいため、それぞれの立場の人にとつての課題と展望を見出すことにあります。

2. 研究方法について

インタビューにご協力をお願いしたいと考えています。プロフィール（所属・生活史・年齢）をおねいさせていただきながら、暮らしの中で、関わりの中で、（自身の・相手の）病気を意識する（させられる）とき、しないときについて、自由にお話をしていただきたいと考えております。

お話を伺う時間は、1回60分程度で、内容により複数回おねいする可能性もあります。場所は、貴事業所内を希望いたします。記録は、録音またはメモを取らせていただくことをご承諾おねい申し上げます。

3. プライバシーの配慮について

調査協力者様ご自身につきましては個人が特定できないよう細心の注意を払い、匿名性に留意します。インタビュー内容については、すべて匿名性に留意し内容を加工致します。加工したインタビュー内容は、必ず調査協力者様へご確認いただいた後に、研究データとして分析対象といたします。分析作業にあたり共同研究者である問題意識を共有する学生へ、研究データを開示致しますが、研究の範囲内で使用するものであり、研究目的以外に用いることはありません。調査期間は

以下、後略。項目のみ記す

4. 協力者の権利について

5. 研究結果について

6. 記録等の保管と廃棄について

図1. 調査依頼書

インタビュー開始手順としては、この依頼文書をインタビュイーに手渡し、口頭で説明しながら、同意書への署名をいただいた。インタビュー時の記録は IC レコーダーによる録音を基本とした。録音した音声データ(1次データ)は、匿名化処理を行った逐語録に筆者が感じていたことをデータとして挿入させた2次データを作成した上で、まずご本人に確認作業を取ることとした。ただし、この確認作業は、確認だけではなく2回目のインタビューとしても位置づけ

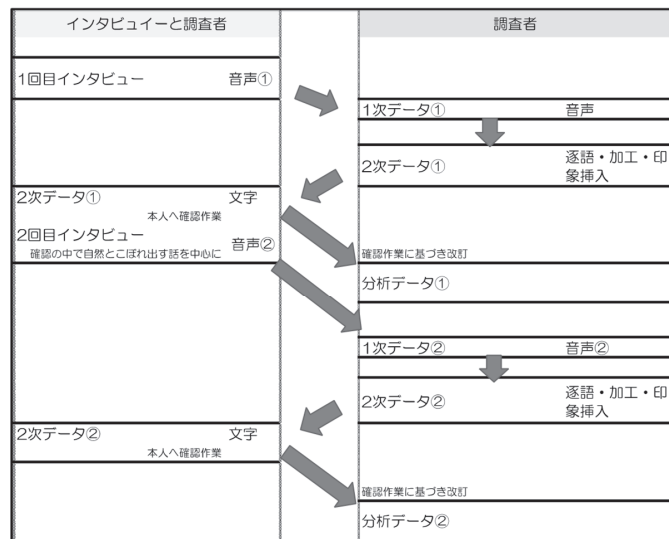


図2. データ分析工程

た。具体的には、筆者も横にいて、2次データを共に眺め確認しながら、さらにそこで話したくなったことも話すという形で行なった。この確認作業及び2回目インタビューにより、分析①(1回目インタビュー時の分析対象データ)と2次データ②(2回目インタビュー)を作成した。2次データ②は同じく、本人確認と修正を経て、分析データ②とした。データ分析対象として扱ったのは、分析データ①と分析データ②ということになる。図2は1次データから分析データ作成までの工程を記したものである。

結果をまとめ、表示するにあたっては、インタビューの流れと文脈を読み取りながら、意味のまとまりが、読み手に伝わりやすくするための最小限の編集を行った。

2.2. インタビュー調査実施までの道のり

個人へのインタビュー調査依頼は、あるフィールドを拠点に行った。後述するNP0法人すみれ会が運営する地域活動支援センターである。したがって、インタビュー調査依頼を個人にして良いかどうかの許可を、まずはNP0法人本体へ問い合わせた。

理事長に調査説明をすると、全体ミーティング(利用者が集まりNP0法人が運営する地域活動支援センターの運営を協議する月1回のミーティング)、常任理事会、理事会で説明をし、承認を得ることが条件として出された。それを一つ一つクリアしていくことが調査開始までに筆者に課された課題であった。

筆者が、全体ミーティングで調査協力を説明する時は、一番前に座る議長の横に立ってマイクで話をした。精神障害を生き抜く、というテーマで研究をしてきているけど、専門家は知らなさすぎると思って20年前から研究調査をしてきたこと、でもそのなかで、「私も、間違っていたなあ」と思ってきたこと。それをすみれ会で気づかされたこと。「私の頭がしっかりしているのもあと10年ぐらいなので、ここで教えてもらったことを、書き残したい、そう思って、お願いをしています」と話しかけた。「普段の一人一人の物語を聞かせて欲しい」と思っていること、「できれば全員に話を聞きたいと思っている」けれど、負担もかけるし、個人個人の事情もあると思うし、「ちょっとでも嫌な感じがあったら断ってください」、「協力したけど、途中でやっぱり嫌な感じになったら、その時も断ってください」と説明した。「直接は断りにくいと思い

ます。指導員の方を通して、気持ちを伝えてくださればと思います」。このように参加者全員に向けて説明をした。

調査の説明が終わると、すぐに、その場で参加者の手が上がり、「いいよ〜。僕も」と言うてくださる方がいた。議長の進行のもと、この後は参加者から、成果物が、調査協力をした人の手に渡るのか、成果物の公開はどのような形でされるのかについて質問をされた。成果物はもちろんそのまま調査協力者に渡すこと、そして公開方法は、紀要とか学術誌に投稿してみるつもりであること、インターネットで公開されていく場合もあることを返答した。

このようなやり取りの末、筆者からの申し出は可決された。

説明を終えた後の反応も様々だった。ミーティング中は静かに座っていた方も、「私も、いいよっ」と声をかけてくださったり、「協力したい気持ちもあるけど、(訳あって)できないわー」という人もいた。ミーティング中、何も言わずに次の議題に目を落としている人もいた。全体ミーティングは一番緊張したけれど、こうしたやり取りを通し、さまざま反応があることに筆者は安堵し穏やかな落ち着いた気持ちになった。この静かで穏やかな、心安らぐ雰囲気を伝えられたらと改めて思った。でもなお、「これからも慎重に調査依頼をしていかなければなあ」という思いを強く抱いたことを覚えている。

2.3. インタビュー調査を依頼したフィールドについて

前述した通り、インタビュー調査を依頼したフィールドは、NPO 法人すみれ会（以下「すみれ」とする）である。そして、インタビュー協力依頼をした方は（する予定の方々は）、皆、「すみれ」が運営する地域活動支援センターの利用者もしくは指導員の方々である。

「すみれ」の歴史は長い。そろそろ 50 周年を迎えようとしていて、筆者がその存在を知ったのも出入りするようになったのも 30 年以上前のことになる。「すみれ」は、1970 年に当事者の会として発足している。北海道立精神保健衛生センター社会復帰学級卒業生 4 人でスタートし、1986 年に「すみれ共同作業所」が創設されている。これは精神障害者当事者が運営する共同作業所としては全国の先駆けであったことが記されている（河野 1995）。さらに 1994 年には、ところ狭しと利用者で溢れんばかりとなった作業所で、利用者のニーズに応じていくため、「すみれ共同作業所第二」を新たに設立している。

1970 年創設から「すみれ共同作業所第二」が設立された 1994 年までの「すみれ」の歴史は、河野（1995）が詳細に報告している。そこでは「すみれ」の生成と発展の軌跡のまとめとして、「日本の社会構造の中に精神障害者を対等に組み入れることによって、社会を一步前進させようとしている運動体」であることと、病と障害を抱えつつ制度的差別や社会的偏見のなかで、「仲間を作り、維持・拡大し、協力者をふやしつ、生きているということ自体が、史上かつてなかった大事業である」と記されている。

その後の「すみれ」は、法律が変わっていくなか、2007 年には、NPO 法人精神障害者回復者クラブすみれ会が運営母体となって、地域活動支援センターを二つ（第一と第二）引き続き運営する形で現在に至っている。この間、創設時こそ専門家の呼びかけがあったものの、その後の日常的な運営はずっと、精神障害者当事者によって営まれ続けていたことは言うまでもない。利用者や指導員が入れ替わったり、激減したり、先頭に立つものが再入院したり、幾度かの存亡の危機にさらされながら、今も運営主体は変わらない。健常者を雇って運営することを助言されていたこともあったらしいが、健常者が混じると引っ張られ乗っ取られてしまう懸念を抱

く人もいるようだ。このような大きな事業を担っている場であるからこそ、現在に至るまで精神保健福祉士や看護師、臨床心理実践を志す学生らの実習先にもなり続けている。

そもそもの名前の由来は、「春先に咲くすみれの花はひとつでは目立たない。でもたくさん咲くと、美しいし、力強い」と語り継がれている。理念は「のん気、こん気、げん気」「ひとりぼっちの精神障害者をなくそう」であろうか。名前の由来のごとく、当事者が集まる中で様々な活動が積み重ねられてきた実績が、「すみれ」にはある。当事者活動、当事者運動、居場所づくり、働く場所、そして仲間同士のごく自然な支え合い、助け合いである。最近では、ピア・サポートが退院支援や地域支援実践のなかで評価され取りざたされることも多くなったが、そうした言葉が使われるようになるずっと前から、「すみれ」ではごくあたりまえに助け合い、支え合いが営まれていた。指導員の仕事も分業で成り立っていて、短時間で単位ごと切り分けられた仕事内容を指導員や指導員補佐が担っている。過去の話になるが、用事があって電話をかけても、この分業体制は頑丈に守られていて、担当者がいないとあっさり電話をかけ直してくれと言って電話が切れた。伝言ぐらいしてくれればなあ、と心の中で呟いていたけれど、いつしかそういう環境に筆者も慣れていった。最近、障害者への就労支援の分野では職場環境の合理的配慮とやらで、単一短時間労働の話が出てくるが、それもずっと前から「すみれ」ではやっていることにて、別に新しいことでもなんでもないのである。

「すみれ」は長年の功績が認められ、最近では、地域精神保健福祉機構から精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）を受賞したり、社会貢献支援財団から社会貢献者表彰をされたりしている。

変化の激しい社会状況や、マルチタスクを求める労働環境の変化、人手不足問題は、「すみれ」にも忍びよってきているように筆者は感じることもある。就労支援事業所間では、利用者の奪い合いが生じているとも聞く。地域活動支援センターであろうと「すみれ」だけが例外であるはずがない。最近では筆者が電話をかけると大概の用事は済むようになった。しかし、用務を依頼する側にとって、それが必ずしも良いとは言えないような気もしている。つまり、1回で用事が済むということは、1人の人が複数の役割をこなしていることにつながっているようで、担う人の負担増が依頼する側としても気になることがある。また、多くの役割をこなす人がお休みだったり、外出（訪問もしている）のときと重なれば、結局は以前と同じように電話はかけ直しになる。それはそれで仕方がない。

法外施設であった作業所時代が変わり、障害者総合支援法の下に位置づけられた地域活動支援センターへの移行によって、実績つまり利用人数と補助金額が連動するようになった。利用人数を気にする所長さんの話を聞いていると、筆者がデイケアスタッフだった時に、通所者を増やすように経営者にプレッシャーをかけられ苦慮した苦々しい経験が蘇ってくる。時代の大きな変化の波の中で舵を取る法人理事長や所長さんたちの苦労はいかばかりかと、何もできない言えない筆者はただただ案じるばかりで、胸が苦しくなることもある。「すみれ」には節目節目に撮影した写真が飾ってある。「〇〇さん、若っ」と言って眺めることもあるけれど、「今、どうしているの?」と消息を尋ねる人もいたり、「ああ、このときは元気だった。」と偲ぶ人も増えたような気がする。人に入れ替わりがあるのは、どこでも同じだが、長い歴史を知る者にとって、人が入れ変わってゆく変化に気づかされる時の感慨はより深いかもしれない。

かつて、「すみれ」に専門家（精神衛生センター職員）が関わっていた時期、社会復帰学級を卒業した人は最初の頃日曜日に集まることになっていたのだけれど、だんだん集まりが悪くな

って、利用者がたった一人になったときのエピソードを山崎氏が紹介している（山崎多美子さんからのロングインタビュー 2010）。当時関わっていた専門家とは北海道精神衛生センター（現北海道精神保健福祉センター）職員の安達（故人）である。その時、安達は「一人でも集まってくるのは意味あることだから」と言い、どうして集まらないのかみんなに聞いてみようということになったのだという。

年月を経ても、おそらく、法定内の組織となり制度が変わった今においても、またこの先も、「すみれ」に息づくこうした志は変わらず受け継がれていくのだろうと筆者は思っている。

時代が変化し、顔ぶれも変わってきたとしても、それでも、筆者が「すみれ」を訪れ、挨拶を交わし、コーヒーを振舞われ、世間話をし、ときに身の上話を聴いたり、逆に尋ねられたりしながら過ごすひとときは、不思議といつも変わらず穏やかに流れていく。

ここまで言葉を尽くしてはみたが、全くもって心もとない。インタビュー調査を依頼したフィールドである「すみれ」は、筆者のような未熟者に紹介しきれることなど到底できるはずがないと思ってしまう。それほどに筆者にとって、「すみれ」はありがたく大きな存在である。

2.4. にいちゃん（仮名）と私との出会いから調査を依頼するまで

今回のインタビューに協力してくださった方は、にいちゃん（仮名）である。「にいちゃん」という呼称はある思いがあって調査協力に際し、ご本人が指定された仮名である。にいちゃんは調査中に47歳になった。そして数年前に2度目の結婚をされたご婦人でもある。

にいちゃんと私との出会いは、10年以上前に遡る。最初の出会いは元デイケアメンバーを介して落ち合った喫茶店だったように私は記憶している。私は、精神科デイケアにスタッフとして、またはボランティアとして関わっていた時期があるが、にいちゃんとは、そうした役割が規定される場でお会いしたことは一度もないまま、今に至っている。

私にとってのにいちゃんは、一見、言葉少なげで落ち着いている人に見えるのだが、とても印象に残る一言を、小鳥のさえずりのように謳いながら、ふっと、さりげなく添える人だ。にいちゃんの早い話の展開に一生懸命ついていこうとするそのさなかに、ハッとさせられる一言を寄せられる人なのだ。インタビューは、もちろん、お願いしようと思っていたけれど、前もって数日前にお願いして、始めるというのではなく、その日（インタビューの日）は、私にとって突然に舞い降りてきた。にいちゃんは、私が調査を始めることを、少し前から知っていたわけなので、いま、思えば、にいちゃんにとっては、突然のインタビューではなかったのかもしれない。「今日は、調子いい。」とおっしゃり、ご主人と一言二言やりとりをしたあとに、「じゃあ、今日、お話伺わせてください」ということになった。

不思議な感覚なのだが、大きな枠組みとしては、私からお願いをしていたことであるにもかかわらず、なぜか、にいちゃんの誘いに乗せられているかのような錯覚を抱きながら、インタビューは開始された。しかし、いざ始めてみると、にいちゃんは調査依頼書を読みながら「この内容に私がちゃんと応えられるかどうかだね、大丈夫かな、って思うけど」とつぶやき、話し始めは何度か調査依頼書の文面を確認しながら話しだすぐらい、私の要望に応えようとするにいちゃんの様子がとても印象に残った。

† この節以降、筆者の表記を「私」とする。

3. インタビュー結果

インタビューの場所は、「すみれ」の事務室のソファで、ラジオ番組がバックグラウンドに流れる中で行われた。ご主人のデスクもある事務室だったけれど、おそらく、気を利かせ、ご主人は席を外していた。二人っきりになった私とにちゃんはテーブルを挟んで向かい合ってソファに座って話を始めることにした。

以下、まとまった分析データの引用は9ポイントで示す。また、私の発言は〈 〉にちゃんの発言は「」、発言中に引用される他者の発言は『 』で表記する。

3.1. 障害者ゆえに障害者としてまなざされる私

にちゃんは中学2年で発病して以来、10代の頃から入退院を繰り返してきていて、通信制の高校を卒業するまでに9回入院している。3、4ヶ月入院しては退院をし、今に至るまでに13回入院をした。診断は統合失調症。10代の頃の自分をにちゃんは「障害者ゆえに障害者にしか、見えないような私だった」という。私は少しこの表現が気になって〈自分じゃ自分は見えないけど、どうして、そんなふうにな。。〉と尋ねると、「いやっ、鏡に映った自分とか、(中略)ウインドウに映った自分とか、どう見ても病気っぽいな、私』」と思っていたのだと言った。またさらに続けて、高校の同級生には、『髪の毛が重たくて、汚らしく見えるよー』とか、なんか、『笑顔で明るく挨拶してくれるのはいいけれど、なんか、いつも具合悪そうだね、あんた』と言われることで、病気の人と見られている自分を「ひしひし感じ」てきたことを話した。

一方、同じ病気だった母親は、家に戻り退院したばかりで「やる気もないし」、「体力もないし、眠たいし、だるいし、もう生きてたくないわって」、「辛い辛い自分だった」にちゃんがソファで横になっても寝かしてくれていた。

同級生からのまなざしと母親からのまなざし、いずれも障害者として、病人としてまなざされていることを感じながら過ごすことに違いはなかったように思われる。しかし、大きな違いが一つある。それは、にちゃんの辛さを察しているか否かである。

だからね、もうね、障害者として、見られる、視線で、厳しい生き方っていうのは、10代、20代のころにずっと経験したので、(力を込めて) 苦しかったですよ。精神障害者として、『なに、あの入って、なんだろうね、気持ち悪い人だね』、みたいな視線が、普通に道通っていても、被害妄想があるからか、そう、思うってのが、被害妄想あるって、また、診断されちゃうんですけど。でも、やっぱり、疲れていると、『何あの人、腰曲がってねー』、あの、入院、退院時って、歩き方もままならないんですよ、なんか、同じ足と手が出たりとかね、あれ、歩き方ってどうだったかなってくらい、わかんなくなっちゃうんですよ。だからね、本当にね、なんか、信じられないかもしれないけど、シャンプーリンスとかしていても、(格好を示しながら) 指がとまるんですよ。きつい薬飲まされていて、もう、朝の薬16粒とか、昼18粒とか、夜になったら24錠とか。そういう、結構、私の親が、『なんで、こんな薬飲ませてるんだ』、って。『つい最近まで、4粒だったのになって。10何粒って、これ、おかしいんじゃないか』って、『うちの子に、こんなに、どうするつもりだあつ』て、親が言っていて、で、あっそうですか、ってことで、9つぐらいに減って。それから、間も無く2カ月ぐらいで退院できたんですけど。ほんと、眠たい、だるいはほんとに口癖で。

母親が減薬を訴えたのは、何より薬の副作用からくる眠気やだるさがもたらす辛さが、見た

目にも響き、不穏な他者のまなざしにまで波及していくことを察していたからなのかもしれない。障害者としてのまなざしには、そのまなざしが辛さを押し量ろうとしているか否かによって、まるで体感温度に違いが出てくるようでもある。

入退院を繰り返す辛く苦しい日々の暮らしのなかで、にいちゃんはかつての作業所（現在の就労移行支援事業所など）や保健センターが開設していた社会復帰学級、デイケアなどを利用していた。「仲間のいる施設に、辛いけど行くってならなければ、よくならなかったなあーって思うんですよ」とにいちゃんは後から振り返っていたけれども、こうした精神保健福祉分野の社会資源の利用は決して順調に進んだわけではなく、通うこと、参加し続けること一つ一つに辛さがつきまとっていた。また、デイケアでの経験やスタッフとのやりとりは幾度となく引き合いに出され、私の印象に残った。

にいちゃんは「言葉が頭の中に、こう巡ってこないんですよ」と、スタッフとの面談の時の様子を以下のように語っていた。

「通うことに意義がある」とかね。でも、そう言いながらも、喋れない、発言できない自分がいたんですよ。言葉がね、頭にね、ない状態。なんか頭の中が、言葉がなくて、白く、真っ白くなっている感じ、（へえー）言葉が浮かばないんですよ、で、言ってることがね、話せるようになりたい、とかね、痩せたい、ダイエットしたいって、そんなことしか言えないんですよ。デイケア通いたくないとか、そういうこと言うんですけど。

また、デイケアスタッフに泣きすがりにいった時のエピソードも語られた。

もう辛くて苦しくて嫌だあーって、早く帰りたいって、言ったら、『ちょっと待って、もう少し、5分いてみよう』って（苦笑）、5分いてみたよーって。できるだけやってみようって、こういうこと。お茶でも、砂糖入れてみたり、飲んでみたり、〈はいはい、できることねー〉ちょっと、やってみただけど、でも、ダメだった。2時間だめだ、耐えられないわーって、帰りたいって言って、泣き言いしたら、『いやーわかるわかる、その、何が辛かったの』って、結局、ガヤガヤ喋ってるんだけど、みんな笑ったり喋ったりしているんだけど、私、何にも言葉が聞こえなくて、間に挟まって、、、『じゃあ、辛かったら、こっちにおいで、座んなさい。でも、ちょっとしたら、戻りなさい』って。戻りなさいかあーっていつて。

ざわざわした環境が苦手なにいちゃんは、ざわつくデイケアの環境に耐えられずに「帰りたい」と泣きついた。しかし、この後もスタッフは結局、帰ることをよしとはしなかった。さらに加えて、同じような状況がこの先予測できる場合は、対処として回避したり断ったりして自分を守る勇気を持つようにと諭したという。

これでは、一時避難を迎え入れながらも、スタッフはにいちゃんが今抱える辛さにまっすぐ応答していないかのようにも思える。気になる場面がもう一つある。母親が心臓の手術で入院中のときのやりとりである。

親がもう、病気で、手術するとか言って、死ぬかどうかって、心臓のね。手術するって、もう、辛くて、家にいても辛くてって、って言ったら、何言ったかって、『頭の中、好きなこと考えてごらん』

って。〈ふふっ〉『それで少しなごむよーって。身が持つよー』って。『お母さん、心臓で苦しくて、入院して、手術して、いま、辛いだろうなあって考えている気持ちがわかるけど』、そう言う時に、自分の障害乗り越えたって言うのが、ちょっとあるんですよね。〈うんうん〉『頭の中、例えばね、好きな風景なんだろうな、沖縄でね、海でビーチでね、もうあったかい海があって、空があって、日差しがあって。あー心地よーって、そう言うふうにな、なんでも、頭の中のことは、とにかく見えないんだから、〈うん〉ゆっくり想像してごらん』って。それも、リハビリだった、と思うんですよ。

いずれもにいちゃんはリハビリだったと受けとめている。「自分の障害乗り越えたっていうのが、ちょっとある」とすら話す。私はかつてデイケアで勤務していた経験もあるだけに、この辺りのエピソードを聞いているときは、スタッフの対応の是非を問いたくなるのを抑えながら、苦々しい思いで聴いていた。

ただ、ここにある「辛さ」は、他者のまなざしに病気や障害を意識させられる辛さや苦しさではないことに注目をし、解釈へとほぐしていきたい。辛さや苦しさの状況は相変わらず外から意図せずやってくる。そもそもこれらのエピソードの中で病気や障害をにいちゃんが意識していたかどうかは判然としない。しかし、にいちゃんがここで「自分の障害」と表したように、少なくとも病気や障害や辛さが受け身にはなっていないことがここでは重要なものかもしれないのだ。

3.2. どんと落ち込みきった果ての

病気や障害や辛さを受け身にせず我が身一人で抱えることは、これまた辛い。薬を追加したところで苦しいことに変わりはないだろう。

にいちゃんは、それでも「どんな時でもね、あの、生きていこうっては、思っていたんですよ」と話していた。しかし、それは、今まで死にたいと思ったことがないという意味ではない。むしろ「死にたいなって、よく、しょっちゅうなんか、嫌なこと直面するたびに死にたいなって思う」のが本当のところらしい。それでも「生きていこう」って思うのには、にいちゃんの生き抜くコツが潜んでいる。

いつときは、辛くて、どんと、こうどんと落ち込むまで、悩んで、考えるんですけど、落ち込んで、そっから落ち込めなくなった時に、ふっと、うき上がるものが、食べ物だったり、するんですよ。

「アイスクリーム、また、来年夏も美味しく食べたいなあ」がふっと浮上するというのである。苦しみのさなかに、自分がもし死んだ時に悲しむ人の顔を思い浮かべて、こんな大切な人を泣かしたらダメだと思い巡らし踏みとどまったこともあるらしいが、これは、他でもよく聞く話でもある。「幸せになって生きていきたいな」とか、目標をクリアしていくような生き方は下手だけど、「結婚は絶対してみたいな」とか、未来につなぐ思いがあれば死にたい気持ちを踏みとどまらせることができることも話すにいちゃんだが、一方で、どんと落ち込み切った果てに食べ物が浮上する話は、なんだか理屈にかなっているような、いないような、まるで魔法のようだ。そして、にいちゃんは「嫌なこと直面するたびに死にたいなって思うんだけど、それも結構、乗り越えるんですよね。〈うーん〉いつの間にか。」とつないでいくのだ。

おそらく「いつの間にか」が肝心なのだろう。「もし、死んだら」を考えるのではなく、「食べたいなあ」と考えているうちに、死にたい気持ちが、気がつけばいつの間にかどこかにいつている、そんな意図せず知らず知らずに作用するような生き抜く術なのだ。

病気や障害を意識して生きるのとは違う、生き抜くための術がここに息づいているように私には思えてきた。

3.3. つながりを手繰り寄せる

私は、にいちちゃんの「辛さ」の物語を聴いていくなかで病気や障害と対立する世間のイメージを浮かべた。それをその場で伝えつつ、その変化について尋ねる質問をしたとき、にいちちゃんは「あっ、それもありますね」と合わせながら、発病した原因について話し始めた。私は、「辛さ」の先について尋ねたつもりだったのだけれど、にいちちゃんは逆により古い記憶を紐解いていったことになる。でもそれが、私の的外れな問いかけや思い込みを解きほぐす応答にもなっていたことに後から気づかされた。

3.3.1. 応答できる私になる-私からあなたへ

こんにちとは言える

にいちちゃんは発病した原因を以下のように話し出した。

発病した原因はね、中学2年の時に、同じクラスの女の子から、『なんか友達になりたいね』って、こう声かけられたんだけど。自分は、暗くて、消極的で、『こんにちわ』って言われたことに、「こんにちわ」って言ったら、話が弾んだはずなのに、〈はい、はい〉『こんにちわ』って言われても、何も言えない、そのうちに、『何だあー』って、傷つくんですね、向こうはね。同じ年頃だから。でも、私はそれで何も言えなくて、悔しい思いをしたんで。

そして、最近バレーボールのスポーツ中継でその同級生にそっくりな選手を見つけて、今なら涙出そうになるほど喜べるのに、「あの時、どうしたら友達になれたんだろうなあ、今でも謎ですよ。〈うーん〉そうですね。『こんにちはー』って言ったら、「こんにちはー」って言えばよかったのに。」と2回目のインタビューでも思い出しながら話した。

裏切らない

だからこそ、にいちちゃんは「どんな話でも対応できる自分になりたいくて」、「友達が『助けてー』ってきたら、裏切らないようにしてきた。そうしたら、友達が、『カラオケ行こう』とか、『食事行きたいねー』と誘われるようになって、それも断らないでいたら1週間ぐるぐる回る自分になって」、「結構、友達のこと、できてるぞとか、暇してないぞ」って思うほどに変わっていったというのである。

『おはよう』に應えられず、障害者にしか見えないというような厳しいまなざしに曝されて断たれたつながりを、にいちちゃんは人を裏切らず、些細なことのようだけれど『おはよう』と言われたら「おはよう」と言える間柄に紡ぎ直すことで、つながりを手繰り寄せていったかのような、対立とはいささか違うイメージとその変化にあとから私は気づかされた。

発病当初のにいちちゃんは中学生だった。おそらく中学生が大人ばかりの病棟にポツリと混じ

っていたら、誰も彼も周りの人にはいちゃんを放ってはおけなかったに違いない。洗面器に『ネアカ』、『頑張れ』、『ファイト』と描いてくれたり、交換日記をしてくれたり、笑顔の練習を勧める婦長さんや、優しい担当看護師さんの話をにいちゃんは私に聞かせてくれた。

「すごく暖かい、なんか、配慮をしてくれて、いっぱい、優しさいただきましたね。それで、私もね、自分の中で、もう、友達が来たら、助けてあげるとか、全然、私より、同じ年頃なんだけど、同じ病気で苦しんでいる友達がいたら、『どうしたらいいんだろうねー』ってったら、それは、「こうしたらいいよー」って言ってあげたりとか、〈うーん〉すごく、助けてあげたいなって気持ちあるんです」

にいちゃんは今、助かったなあー自分は恵まれてるなあって思うことを数えるようにしている。そして、友達になれなかった悔しさとともに、してもらったことのお返しとして、他の誰かにして返すというように、まなざされるだけの存在から、応答しまなざし返すほうへ、にいちゃんは優しさに包まれ柔らかな弾力を孕みつながりの糸を手繰り寄せ、返していったように私には感じられた。

この場で安らぐために

支援センターでもいろいろお世話になり教えてもらった経験から、にいちゃんは他の誰かにして返そうとするときに、「みんなね、結構、重たくしてね、具合悪くしてくるからね、寂しくしてくるんだろうなーって思うから」、と声をかけて隣にそっと座ったり、「この場を楽しむために」、「気分良くするには」どうしたらいいんだろう」と考えて、笑わせることを考えたりもしている。

ただ、チョココンと1時間ぐらい一緒に横に座っていて、そのあと『疲れたから帰るわー』って言って帰った人でも、『本人すごく満足してたわー』と、センター職員が喜んで、あとから感謝された話を聴いていると、にいちゃんのその身の置き方を想像するだけで聴いている私までもが、ほっと安らぐような気がした。

3.3.2. 応答できる自分になる一人から状況への拡がり

ちょっとだけ頑張ればできることを

裏切らないでいること、助けてあげるといった人とのつながりの保ち方は、一方で骨が折れそうでもある。それを意識してかしないでか、にいちゃんは次に「やろうかな、やりたくないなあ、だったら、ちょっと頑張ったらやれる方向へ、いつも選んできたんですよ」、そうしたら「ここまできたぞっ」と話をつないでいった。

退院したばかりの自分は、「何もしたくないし、本当にものを触るのも、なんか嫌なんですよ」というにいちゃんに私は思わず、〈なんだか世界と関わるのが…〉とことばを添えると、すかさず「嫌だなあって」、「もうめんどくさいなあ」と言葉をつないだ。そこから動き出すには、一苦労なはずなのに、にいちゃんは、だからこそ少し頑張ればできる方を選ぶということなのだ。

自分にとってちょっとだけ頑張ればできる方へ、という選択は、例えば、「椅子に座る」から始める編み物だったり、デイケアを利用する時期であったり、「デイケア卒業するには120%デイケアを活用しなければ出れない」という選択の話にまで連想が広がっていったように思えた。

「ちょっとだけ頑張る」は病気を意識すればこそであり、この「ちょっと」が肝要だ。例えば、主治医の助言であれば「なだらかにして、無理なくできることだったら、やってもいい」だし、誰かに聞いた話でいけば、螺旋階段を上るみたいに、「ちょっとずつわけわかんない状態で、こうわからないもの、目に見えないもの、坂を上がって行くんだから、急に体、ガックンって上がるのは、よくない」のだ。

この戦法は、病気を意識すればこそその選択でありながら、無理なく、を実現するために「わけわかんない状態」を推奨しているところが妙でもある。

いい加減で応答できる自分になる

最初は挨拶や裏切らないという一人の人へのささやかな応答がテーマであったにいちやんの物語は、ちょっとだけ頑張ればできることを、という生活世界へと広がりを見せていた。そして、ちょっとだけの頑張りは、いい加減と言い換えても良さそうな日常生活のエピソードに広がっていった。

例えば、料理だ。にいちやんのリハビリ開始の振り出しになった区役所の社会復帰学級には、表情豊かでおおらかなスタッフがいた。『肩揉んで』って言われて、にいちやんが肩もみをしてあげながら、お悩み相談をするようなスタッフだ。おでん作りのための買い物をしているとき、スーパーの通路でにいちやんは、「どんな、、、ええっと、おでんには、何、入れるんだろうな、おでん、おでん、おでん、おでん」って、目を上にあげて、立往生して叫んでいた。そんなにいちやんに、スタッフは『これなかったらどうしよう、どうしようって、こうしなかったらどうしようって、思いがちだけど、そんなこと、どうだっていいんだよって、おでんにね、卵入ってなくても食べれるんだからって』と声がけをした。にいちやんにはそういう発想がなかったのだ。

そのあと利用したデイケアでも同じようなエピソードが語られた。スタッフに食事づくりを相談したとき、『死なないように食べていけばいい』とずれた返答があっても、それでも「究極の答え！」と一瞬、納得したり、カニの茹で方を知らないデイケアスタッフが『聞く力あれば、知らなくてもいいんだよー』って教えてもらったり、である。

だから、なんも知らないことは、恥ずかしくない。〈うんうん〉恥ずかしくないけど、知らないんですよ、って言って、教えていただければ、なんか聞くことできるじゃないですかあ。〈うんうん、そうですねー〉これで、困ったよーって、ことあれば、困ったよ、って

こうしてにいちやんは、リハビリの場で出会う人たちの知恵を吸収し、生活世界への応答を弛めていったのだと私は後からしみじみ思った。

環境に状況に自分が合わせる

にいちやんは生活世界への応答を緩めていくのみならず、状況に合わせていく応答についても語っていった。具体的には、臨機応変に応答することだったり、予定通りに待ち合わせ場所まで一人で行動することだったりだ。デイケアに通うこともそれに適っているとと言われてきたにいちやんは、まさにそれが実際に試された出来事を話してくれた。一人暮らしの時、急遽決まった電気工事を済ませるために、急ぎ部屋の荷物をどかして対応しなければならなかったのだ。

動作自体は些細なことのようと思われるかもしれない。しかし、「土壇場とか、プレッシャーとか」、予測し得なかった未来の変更に自分を合わせなくてはならない事態に対して自信が持てない、それは、「病気になるときに、よくある過程」なのだ。そして、それができるといことは、大きな自信につながる。

にいちゃんは、デイケアスタッフに『明日、役所に行ってくださいって用事があるときに、それでも、行けるように、いつでも行ける（少し強調して）ってことをするために、デイケアに行く（力を込めて）ってことが大事』って」と言われた話を、たいそう力を込めて、私に聞かせてくれた。そして、改めてこの部分を読み返しながら、客観性を養う努力もしたし、人から普通に見られたくて、本を読んだり、滑舌良くしたりして、今の自分は関心ごとが増えて、多趣味になったという話をつないでいった。まさに、手の届く周りの環境や状況に自分を向けていくような広がりのある言葉のように私には感じられた。

3.3.3. くっちゃべるようになる

にいちゃんはデイケアに3年通っていても、それでもなかなか自分から話すことができるようにはならなかったと回想した。デイケアで女子は自分だけになって寂しいときに、「辛い」とスタッフに言ったところで、スタッフがいくら辛いと言えたことを褒め支持したところで、また『一緒に考えよう』と言われたとしても、「辛いときは辛い」ままだった。

それが、「くっちゃべる」ようになったのは、最後の入院の時、病棟タバコ室での経験だったという。「どんだけリハビリしても喋れなかったのに」、タバコ室にいるメンバーがみんな楽しそうに、気楽そうに好きなことしゃべっていて、なんか、それ聞いてたら、「いつの間にか」、自分も退院する頃には発言できるようになっていたというのだ。暫くぶりに会う友達に、『変わったよねえー』、『あの頃、なにも喋れない、なんもできないにいちゃんだと思ってたけど、私よりできるようになったじゃん』と言われるほどに、である。にいちゃんは「不思議だなあ」、「リハビリは必要なかったんだって」笑った。

「いろんな人の言葉を聞いていると喋れるようになる」というのは、当時の主治医の助言でもあった。にいちゃんは、5歳上のお姉さん（今はもうお亡くなりになったそう）のコロコロと言葉を転がすようにしゃべる声を心地よく聞いていた。そういうにいちゃんは周りの人からは、『にいちゃんってなんかいつも存在感ないよねー』と言われ、人に気づかれず、『ずっと座っては、すっといなくなって』みたいな存在だった。でも、そうしながらも「喋れるようになりたい」って気持ちを絶やさずにいた。『くっちゃべるようになったねー』の一言は何より、にいちゃんの変化を表す言葉なのだ。

3.3.4. 精神障害を打ち明けて

にいちゃんは応答できる自分になっていきながらつながりを手繰り寄せ、生活世界との接触面を増やしていた。それは、同じ病気の仲間や医療・福祉関係者のみならず、にいちゃんの病気のことは全く知らない店員さんとの間でも営まれていた。

にいちゃんには「10年ぐらいなる友達の店員さん」がいた。店員さんとのつきあいが10年ほどたった頃に、にいちゃんは自分の病気をカミングアウトした。

「10年間、こうしてね、店員さんとして話してきたけど、隠してることもあるんですよ」って、『何？

隠してるの？、そんな水臭いこといわないで、教えてー』っていうから、〈うん〉「教えてもいいけど、私のこと嫌いにならないでほしいですよー」って、言ったら、『嫌いになんかならない、なんですかあ、なんですかあ』っていうから。「私一、まあ、こう普通に見えるかもしれないけど、障害者なんだよね」って言ったら、『へえーなんの障害者なんですかあ、どこが悪いんですかあ』っていうから、「精神なんですよー」って言ったら、『へえー、そんなふうに見えなかったし、言っても、私、あんまり、そんな言っても私、気にしない』

その店員さんとは、愚痴を言ったり聞いたりする間柄だったけれど、結局、店員さんはお子さんを産後、保育園が決まらずその後、関係が途切れてしまったらしい。しかし、挨拶を返す、人を裏切らないというところから手繰り寄せていった人とのつながりにかかるにいちやんの物語の中で、この経験は大切なもののように思われた。障害者としてのまなざしを身に降りかけてくるような他者はおらず、逆に自ら意識して精神障害者である我が身を差し出しても、『そんな言っても、私、気にしない』という他者が出現しているからだろうか。

3.4. 病気や障害の取り扱われかた

にいちさんは、思い返すと一人暮らしをしてからの15年間は入院していない。しかし、冒頭に紹介したように、中学生で発病したにいちさんは計13回の入院を経験している。にいちさんは調査依頼文書を読み返しながら、「でもね、障害者、、ってね、生き抜くときにね、なんかしょうがなしに待つ時期もあるんですよ」とつぶやいた。言い換えれば入院生活での病気や障害の取り扱われかたでもある。それは、やがて退院したあとの物語への想起へと広がっていった。

3.4.1. ひたすらしょうがなしに「待つ」

まずは、入院生活である。にいちさんは「ひたすら待つ」、「しょうがなしに待つ」という言葉を選んだ。

「もう、早く退院したい、明日に退院したい」って思っても、「ただ待つ、ひたすら待つってことも大事」と、にいちさんはインタビューの後半に、「でもね」の次に言い添えた。そこから思い出された閉鎖病棟での生活は次のようなものだった。

若いとき、10年ぐらい、閉鎖病棟で。〈うーん〉大変でしたよ。閉鎖病棟はもう、バケモノみたいなもの、いっぱい見たし。おばあちゃんだって、かなりの妄想で。『私、なんとかの星のおばあちゃんだあ』ってとかって。(中略)『看護婦しゃーん』、って今すぐ飛行機に、飛行機乗って、みかん10粒すぐ買ってきてー』って、『冬みかん買ってこいっ』て、言ってるんですけど、おばあちゃんね。〈うんうん〉ああー買ってきてあげればいいのになって、思ったら、待って、、でも飛行機乗らなきゃ、冬みかん買えないなって、思ったら、(中略)ああ、この人も具合悪いんだあ、って思って、(中略)苦しかったですねー。一番その時が苦しかった。本当に苦しかった。

『お口にチャック！』って言われたけどね。『お口にチャックしたら、病棟、大部屋にも行けるし、退院もできるし。』

今でこそ、病棟も綺麗になり「ピンポンって鳴らしたら、看護師さんが」来る環境なのだが、当時は、違っていた。朝早く起きると水洗トイレの水が流されておらず、たまらずにいちちゃんが代わりに「ガチャガチャ流して」たら、看護師に『余計なお世話だ』と言われたエピソードも思い出されていた。

ちなみに、このおばあちゃんはいちちゃんが再入院したときに、また、病棟で再会している。ライオンのような顔をしていたおばあちゃんは、良きおばあちゃんになっていて『アラーあんだ、うちの孫より可愛い』って、『利尻の昆布あんたにあげたい。住所教えてー』と話しかけてくれた。住所を教えても、教えても、教えてくれてないでしょと毎度聞かれ、毎朝、昆布あげたいという言葉にいちちゃんは引き受けていたそうだ。

にいちゃんは、2回目のインタビューでご自身のメモを見ながら、

やる気のないときは、代わり映えしないとか、つまんないとかね、おもしろくないなあ、とか思うんだけど、そういう、会話、つまらない毎日に、あきらめないで、投げ出さないで、くじけないで、ただ、ひたすら「待つ」っていうことをしたらいい。

このことを自分で感じてきたし、言われてもきたことをにいちゃんは話した。病気や障害が関わっているであろう入院生活もやる気のないときも、その扱われかたとして、ひたすら「待つ」ことを推奨するのは、病気や障害を前にして仕方なしにひたすら耐えて「待つ」しかないという意味のようにも感じられ、私には切なくなり、その底の底にどうかしぶとさが絶えずに息づいていますようにとすがりたい思いを抱いた。

3.4.2. 病気の仲間がいるところで回復してきた

にいちゃんは自分の場合は、特に「こういう病気の仲間のいるところに行かないと、良くなれなかったと思うんですね」と、1回目のインタビュー逐語録を読みながら呟いた。「仲間のいる施設に、辛いけど、行くってならなければ、良くなかったなあーって思うんですね」と話すにいちゃんは、作業所やデイケアや保健センターの社会復帰学級やそして「すみれ」を利用してきた人だ。

この文脈で、にいちゃんはいったいどのような経験をしてきたのか、私は詳しく聞くことができていない。ただ、問わずとも出てきた話は、再び、「「おはよう」とか、「こんにちは」とか、も言える友達」のことだった。

今でも、こう緊張して、ずっとうつむいていて、静かーにしている友達がいて、(中略)残してきちゃっていることを心苦しく思うんですね。

あいさつを交わす友達がいることは、にいちゃんにとって何よりかけがえのないことであったに違いない。それは、にいちゃんが語る発病の原因をたどれば痛いほど伝わってくる。

私は、この「おはよう」、「こんにちは」の話を聴くうちに、回復の契機にあるのは、応答する自分になるばかりではなく、呼応する他者の存在もあったのだろうか、とあとから思い至った。

3.4.3. 何か役に立つことを

にいちゃんは、機会があるとご自身の文章をよく発信される。口頭でもすくっと立って自身の経験を発信する方だ。それは、つながりを手繰り寄せる中で、人を裏切らないように安らぐ場になるように心を砕くにいちゃんだけに、後世に自分は何を残せるだろうか、「どういうふうにしたら誰かの役に立てるかなって」普段から考えているからなのだろう。

掃除していても、なんか、『ありがとう』って言ってくれる人がいたり、(うん) なんかしてくれて『ありがとう』って言ってくれるの、助かるんですよねー。(中略) 自分がなんか、してあげてなくても、なんか、なんかもう、何か役に立ってる、とか、逆に、何かもっと、病気が苦しい人が、『どうしたらよくなるんですか?』って質問されて、答えられたら、本当にいいなあ、って思ったりするんです。

私が依頼したインタビュー調査に応じることも、にいちゃんにとっては、「変なっていうかね、珍しい体験、なんていうのかな、自分の経験と境遇とかを話して、誰かの役に立てたらいいなーって思ったりとかしていて、」という思いの延長線上にあったのだ。にいちゃんが、後に何かを残したいと思う相手は、何より同じ病気の仲間なのかもしれないし、専門家と言われる人たちなのかもしれない。

3.4.4. 心に氷があるような

にいちゃんにとっての病気や障害の扱われかたを聴いていくなかで、私がそれらを少しまとめて返し、〈病気とか障害って、なんか、はたと周りの人とやりとりするときに、(中略) よかったな、って思うこともあるのかな、それとも、やっぱり嫌だなんて思うこととか、…〉と尋ねると、すぐに「うーん、ありますね」という応答があった。そして、以下の話をつないでいった。

私ねー、昔入院してたとき、もう10代の頃なんですけど、いつも、なんか、心に氷があるような、ここになんか、しこりがあるような、苦しいんだけど、不安で、っていうのがあったんですよ。(中略) 私は、その不安をどうしていったかっていうと、その時は、不安でしょうがなかったんだけど、じゃ、不安だ、どうしようもない、でも、この不安は、苦しさしかないから、(中略) 不安でも動けることをしようって。

一つは寝ることであり、もう一つは「不安だけど動いてみる」だ。

「なんか、買い物が、お使いが一人でできたとか」、「玄関の掃除ができたとか、一個一個、今日は、これできた、今日は4つできたなあとか」、そういう生活のありきたりな営みが少しずつ絡み合って、「そんな生活をぐるぐるしているうちに、だんだん、不安が、とれて来て」行くのだという。

にいちゃん曰く、まだ被害妄想はある。

この、しこりみたいな、辛い苦しい、一番そこがネックだったところ。でも、ネックってね。覚えていた方がいいんですって。自分がどういうときに具合が悪くなるときとか、苦しくなるとか、自分はこういうのが弱いとか、こういうの苦手とか、そういうときに、そういう立場の、場所に、身

を置かないことが必要なんですって。

にいちゃんは、氷のようなしこりを日々の生活の中で溶かしていきながらも、あえて記憶には留めようとしているのだ。

3.4.5. 水を飲むように薬を飲む

にいちゃんは2回目のインタビューに応じる際にも、最近書いた原稿とメモを手にしてくださっていた。その原稿に書いてあったのが、『水を飲むように薬を飲む』というアドバイスだった。

薬を服用しないと大変なことになるという意識ではなく、そういうのは横に置いて、〈普段の水、補給のごとく飲むっていう、ふうに、あんま意識しないみたいな、そんな、意味合い？〉と問う私に、にいちゃんは「そういう感じです」と答えた。そして、

『薬飲むの嫌だあっ』て、とかってこう、ある人いっぱいいるけれど、朝になったら、水を飲むように薬を飲む。大事っていうか。

最初、私は原稿を読んだとき、騙されたと思って飲むというようなごまかしみたいな呪文だな、と正直思っていた。けれども、いちいち意識しないで飲むということは、よくよく考えてみると、受け取りようによっては、違うカラクリがあるのかもしれないと、途中で気づいた。しこりを記憶することとは逆の扱われかただけけれど、いちいち意識していたら目障りだし、面倒くさいし、回避したくもなる。忘れないようにセットしていたら、しこりのような氷が溶けそうになっているのに、かえってカチカチッと冷えて固まり出すかのようなイメージすら湧いてくる。服薬の扱われかたは病気や障害の扱われかたの象徴でもあることは、私の研究のなかでも明らかになっていた。つまり、服薬を意識しているうちはまだまだ薬にはなれないということなのかもしれない。そう思って、にいちゃんに問い返したとき、即座ににいちゃんから同意する言葉が返ってきたわけである。

3.5. 意識させられる病気・障害

「心の中にある氷」は外側からはみることができない現象だ。しかし2回目のインタビューの後半に語られたにいちゃんの経験は、現実場面から病気や障害を意識させられる、目に見える現象として淡々と語られていった。

3.5.1. 働くとう入院になるとき障害者だなんて思う

にいちゃんは、「これ、(1回目のインタビューでは)言わなかったかな」と前置きをして、「働くとうすぐ入院になるときに、障害者だなんて思うんですね。」と話した。

にいちゃんは2回ほどバイトをしてみたものの、1回目は3日で倒れて、4日目に入院し、2回目のバイトは、8日間働いたけれど、9日目から入院した。楽しかったのに、休憩室にはコーヒーマシンがあってお菓子が置いてあって、病気のことは言わずに勤めていて職場の人たちは私を病気と思わなかったみたいで、可愛がられていたかもしれないのに、「入院って。(中略) 何度働いても入院するから、私、障害者だなあーやっぱり、働けば、入院がつきものなんだなあって」

とつぶやいた。

2回目のバイトは、郵便配達で、「わーたしは今、生きている♪って森高千里の歌、歌いながらね、るるんって楽しかった」。喉が渴いて「炭酸飲料4缶、ガーガーって飲みながらだった」。

前にも記した通り、にいちゃんは、ここ15年間は入院をしていない。作業所は10年続いている。それでも、引越しがあった時は酷くて入院しそうになった。その時のことをにいちゃんは以下のように振り返り、働くことについて語っていった。

みんなが病気を理解してくれる、なんか、職場の仲間っていうか、周りの人も病気ですし、あんまり、『無理すれ、無理すれ』っとか言わないし、まあ、そういうなんか、気遣ってくれてね、空気読んでくれたりね、あるから、あまり崩さないでいられるんだなあって思って、助かってるんですけど。健常者の中で働くと、どうしてか、なぜか、体調、自分で勝手に崩しちゃうんですね。

主治医が変わったり、母親が亡くなったり、離婚したり結婚したり、こういうときは入院の恐れありと医者にも言われていたけれど、「環境変わっても大丈夫っていう自分がいて」、なのに、働く場は、入院になり、障害者であることを意識させられてしまうのだ。『どうしたら、健常者のとこで働けるのかっていうのも、謎』とにいちゃんは言う。

私は職場の環境調整さえうまく合意がつけば、と安直に考えてしまいがちなのだが、ことはそう簡単ではないのかもしれない。

3.5.2. 仕立て上げられていく病状悪化

にいちゃんは1回目の逐語録を見ながら、最後の最後に、まだ話していないことで悪い病院、看護師さんの話をすることを前置きして、自身が保護室に入ってから暴れた話を淡々と語り出した。それは、入院した日、よくある看護師と患者の口約束から、「化粧落とせないだけで」、「暴れたから、キチガイ扱いされて」と、にいちゃんの中で「一番ひどい体験」だった。

出来事は、疲れているから保護室に入りたいからとにいちゃんが主治医と相談して、合意の上で保護室に入った夕方から始まる。

その日の夜に、「化粧落としたいです。」〈うん〉で、(中略)看護婦さんに約束しておいて、「保護室に入る前に、夕方になったら、〈うん〉メイク落とすと化粧とるバケツじゃないや、洗面器に水張ったのと、石鹸とクレンジングと欲しい」って、『そんなこといいですよ、全然、大丈夫』って言うから、〈うんうん〉保護室にゆっくり入って休んでいたら、〈うん〉あれって、何時になっても来ないぞ、と言うことで、看護婦さん、看護婦さんって呼んでも、結局、何回呼んだんだろう、結局、あんま、しつこいって、たぶん、その頃、保護室モニターついているので、詰め所から見えるんですよ、〈はい、そうですね〉あんまり、しょっちゅう呼ぶと、〈うーん〉看護婦さん、来ないんですよ。〈はいはい〉それでなんか、あんまりダメだって諦めて寝て、横になって、疲れとるかあって、それで、なんでだか、知らないけれども、〈うん〉暗くなってきた。もう一回呼んでみようって、そうしているうちに、〈うん〉なんだろう、あの一、なんかこう、しょっちゅう同じ看護婦さん呼ぶことが、病気だってみなされてしまったんですね。

その夜、次に起こったことは、5、6人の人が注射器持って保護室に入ってきて『寝てもらおうか』だった。『大人しく横になりなさい』と言われても、自分は化粧を落としたいだけだったわけで、合点がゆくはずもない。わざと、「こんな雑誌持ってって、こーんな彼氏いるから、子どもも欲しいし」って言うてみても、ダメで、注射は嫌だと抵抗しているうちにさらに人が3、4人毛布を持って入ってきて、

バサーーってかけてきて、なにに、、、って、いってるうちに、お尻グツとめくられて、そこ、お尻のこの辺に、ぐさって、こんな注射ぐらいじゃ、私寝れないぞーって思って、余計騒いで、それで、刺されて、注射打ちました、はいって、注射打ったって、、、（中略）それで、打たれたけど、眠たくなって、寝るかあって思ってた、余計目が覚めて、「看護婦さん、看護婦さん、なんでこんなひどいことするのー」っていったら、余計悪くなったって思われて、〈また、、、また、、、〉そしたら、担架きました。担架きて、とにかく、この状態で、夜騒いだら困るから、うるさくされたら困るから、担架で、とにかく、保護室、『ここの保護室ダメだから、男子用の保護室に行くから、担架にとにかく乗ってって』で上がったんですよ。

にいちちゃんは、この後、男性の看護師に、『こんなねー、あのー、にいちちゃんのことね、手、縛らなんてことはね、僕もしたくないんだよー、でも、今晚の先生が、そう判断したから、縛らせてもらうからー、ごめんなさいねー』って。『明日になったら、先生、先生が外してくれるから、大丈夫だからねーって』って言われながら、波打つように動かし抵抗していた腕も縛られ、オムツまでされたのである。夜中じゅう寝ずに抵抗して、「みず、みず、みず」って言って、身動きも取れないなか、異性の看護師が閉じられた空間に入ってくることの怖さに怯えながら、変な手出しはないことを確認すると、「わかりました、じゃ、今晚よろしく願いいたしますって」、にいちちゃんは頭を下げたのだと言う。

3.6. さいごに

私が2回のインタビューのお礼を伝えると、にいちちゃんは、「やっぱりね、なんか、病気が良くなるっていうのはね、大変なことだと思うんですよ」、なかなか良くなっていかない人だっている、そんな中で、いろんな経験をしてきて、「今まで本当に余計な出会いとかなかった。ほんとに必要な出会いだったような気がして、皆さんのおかげで良くなったような気がして」と言い添えた。保護室でのひどい経験を話したあとに、なお、この言葉が続いていくことに、私は、戸惑いを覚えながら、今一度、にいちちゃんが語る「皆さんのおかげ」の意味について思い巡らせ、改めてお礼を述べインタビューを終えた。

4. にいちちゃんの物語をたどる

前節に表した結果の内容構成を表1に示し、以下に私が捉えた、にいちちゃんのインタビュー時の物語をたどっていく。文中、前節に掲げ、さらに表1に記した大見出し、中見出し、小見出しを表記する場合は、「**ゴシック体**」で記すこととする。また、本節からにいちちゃんについては、「彼女」という呼称で示すこととする。

彼女の発病は中学2年。義務教育を受けるさなかから入退院を繰り返してきている。そんな当時の状態を彼女は、「障害者ゆえに障害者にしか、見えないような私だった」と語り始めた。

思い出されるのは、「なんかいつも具合悪そうだね、あんた」と言う同級生の言葉だ。これを被害妄想という言葉でくくってしまったら、彼女の生きられた経験世界への橋渡しは絶たれてしまうだろう。一方、同じ病人としてのまなざしであっても、その辛さを察する同じ病気を抱えていた母親のまなざしはむしろ保護的だ。

彼女はその当時、地域にある精神障害者が利用できる社会資源をほぼ全て経験している。そして、参加に伴う辛さもまた経験している。治療を続け退院したあとも、やる気なく、眠く、だるく、もう生きていたくない、「辛い辛い自分」という意識が彼女にはあった。そして、「言葉がね、頭にね、ない状態」、「真っ白くなっている感じ」というように、デイケアの面談で喋れない自分を語った。

彼女がデイケアを利用しているときに、辛くて早く帰りたくてスタッフに泣きすがりにいったときのエピソードでは、スタッフの矛盾した応答に、私は、最初気を取られてしまった。しかし、次の母親を案ずるがゆえの辛さをデイケアスタッフへ話した時のエピソードで、そこに生じている彼女の辛さの変化に後から気づかされた。それは、発病時にあった外からまなざされる辛さから、自分の辛さに変化しているということだった。「自分の障害乗り越えたっていうのが…」と語り直されている彼女の言葉にそれを見ることができるようになるのだ。

だからこそ、我が身で抱える辛さの中で、「死にたいなって」「**どんと落ち込みきった果ての**」果ての話が次に綴られていったのかもしれない。彼女は不思議なことに、死にたいなって思いに苛まれている渦中に、「アイスクリーム、また、来年夏も美味しく食べたいなあ」がふっと浮上する、そしたら「いつの間にか」死にたい気持ちがどこかにいくというのだ。辛さや死にたい気持ちを意識して四つに組むのではない、生き抜く術に私も不思議と話を聴きながら導かれていった。

彼女は私の的外れな質問に応じる形で、発病の原因を語った。期せずしてであったが、それは「**障害者ゆえに障害者としてまなざされる私**」という生活世界との隔絶と一方的な規定が、

表 1. にいちゃんの話

大見出し	中見出し	小見出し
障害者ゆえに障害者としてまなざされる私		
どんと落ち込みきった果ての		
つながりを手繰り寄せる	応答できる私になるー私からあなたへ	こんにちとは言える
		裏切らない
		この場で安らぐために
		ちょっとだけ頑張ればできることを
		いい加減で応答できる自分になる
病気や障害の取り扱われかた	応答できる自分になるー人から状況への拡がり	環境に状況に自分が合わせる
		くっちゃべるようになる
		精神障害を打ち明けて
		ひたすらしょうがなしに「待つ」
		心に氷があるような
意識させられる病気・障害	病気の仲間がいるところで回復してきた	病気の仲間がいるところで回復してきた
		水を飲むように薬を飲む
		何か役に立つことを
		働く入院になるとき障害者だなんて思う
		仕立て上げられていく病状悪化

なにゆえに生じせしめられたのかを解きほぐす物語でもあった。

『「こんにちは」って言われても、何も言えない』、「「こんにちは」って言ったら、話も弾んだはずなのに。」これが彼女の語る発病の原因だった。応答することができなかったという悔いは、生活世界とのつながりがそこで断たれてしまったというほどの大きな意味があったのではないだろうか。私には合点のいく話であった。私は、彼女のこの話から、些細なことのようにだけれど挨拶を交わすということの大きな意味を教えられた。

私からあなたへ「**応答できる私になる**」。それが生活世界とのつながりを再び取り結ぶために必要なことだったのであろう。その一步が挨拶なのだ。そして、「**裏切らない**」ように、他の誰かも「**この場で安らぐために**」心を砕くように、彼女は再び「**つながりを手繰り寄せ**」ている。

「いっぱい優しくいただきましたね」という彼女は、同級生と友達になれなかった悔しさとともに、してもらったことのお返しとして、他の誰かにして返すというように、まなざされるだけの存在から、応答しまなざし返すほうへ、優しさに包まれ柔らかな弾力を孕みつながりの糸を手繰り寄せ、返していく物語を綴っていったのだと私には捉えられた。

「**応答できる自分になる**」ことは、あなたに向けて始まり、より広い生活世界へ広がっている。それが、「**ちょっとだけ頑張ればできることを**」であったり、きちんとちゃんと応答しなくちゃいけないのではなくアバウトで、「**いい加減で応答できる自分になる**」であったり、臨機応変に応答したりというような「**環境に状況に自分が合わせる**」かのように捉えられた。

このような試行を続けていても、自分から話せるようになったという実感は、デイケアに3年通っていても十分ではなかったことを彼女は綴っていった。「存在感ないよねー」とすら言われた彼女が、「**くっちゃべるようになる**」のは、最後の入院病棟でのタバコ室での経験だった。楽しそうに、気楽そうに喋っている言葉を聞いているうちに、「いつの間にか」変わったねと言われるほどに彼女はしゃべることができるようになったのである。これは「**応答できる自分になる**」もっとも実感の伴う彼女の中の変化だったことがうかがわれた。「不思議だなあ」、「リハビリは必要なかったんだって」と言葉をつなぐ彼女の思いには、自らできるようになった実感が込められているのだと今になっても思わずにはいられない。

10年来つきあった店員さんに自分が精神障害者であることをカミングアウトした経験は、喋れるようになった自負があつてのことであろうし、かつ、まなざされるだけの自分ではなく、我が身を差し出す大きな賭けに対して、否定されなかったという大きな糧を手にしたエピソードのように私には捉えられた。

ここまでは、できるようになっていく物語が綴られていたのだが、後半、一度まとまりかけた物語は、釘をさすように「一番その時が苦しかった」という入院病棟の話に立ち戻っていった。彼女は「みかん10粒～」と具合が悪く叶いそうもない願いを叫ぶおばあちゃんを思い出し、思いを寄せながら、叶わぬ願いの辛さを自分自身にも重ねて、物語を綴っていたように私には思われた。彼女が、「**ひたすらしょうがなしに「待つ」**」そういうこともあるのだということを手説せずにはいられない思いを決して軽んじてはならない。自分の力の及ばない状況に翻弄される不条理であろうか。その上でなお、自分の場合は、「**病気の仲間がいるところで回復してきた**」、でなければ良くなれなかったと思うと話し、自分の経験を話すことで誰かの、「**何か役に立つことを**」と綴っていく彼女の物語は、常に他の誰かをケアしようとする思いが通底しているようにも受け取れたし、それが病気を意識しながら生き抜く上での芯になっているように私には捉えられた。

彼女は、病気や障害の取り扱われかたを質問する私に、10代の頃抱えていた「心に氷があるような」生活があったことを話した。「不安でしょうがなかった」、「どうしようもない」、そのときの彼女は、「この不安は、苦しさしかないから、(中略)不安でも動けることをしよう」という方へ動いている。前述した戦法である。そして、自ら記した原稿も手にしながら、「水を飲むように薬を飲む」話へとつないでいった。「不安でも動けることをしよう」と「水を飲むように薬を飲む」には共通するところがある。一言で言えば、それは、「いつの間にか」である。この戦法に関する考察は、後節に詳述する。

しかし、「いつの間にか」ではどうにもならない事実ももちろんある。それが「働くと入院になるとき障害者だなんて思う」、だったり、「仕立て上げられていく病状悪化」という物語として綴られていた。『疲れているから』と保護室への入院を医師と静かに合意したであろう彼女が、化粧を落としたというニーズに対する看護師の応答のずれから、どんどんと病状悪化へと仕立て上げられ、処置され拘束されていくさまは、目を覆わずにはいられない。いや、いや、見て見ぬ振りには許されない。

「やっぱりね、なんか、病気が良くなるっていうのはね、大変なことだと思うんですよ」という彼女の言葉は重い。彼女が綴った生きられた経験の物語はここに尽きるのかもしれない。

5. 考察一意識してどうにかなることとならないことがある

本節では、研究目的に戻り、にいちちゃんという人のインタビューによる事例報告から得た発見を以下に述べる。本研究の目的は「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」、地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探究することであった。

彼女が綴った経験の物語から捉えられた教示の一つは、「障害者ゆえに障害者としてまなざされる私」に示された“他者のまなざしに自身の病いをみる”ことの意味である。中井（2010）は、統合失調症状態の急性期を、存在は完全に「世界」対「自己」に二分され、「世界」は「意味するもの」の総体となり、「自己」は「意味されるもの」となるがゆえに、人は“まなざされ”るだけではなく、世界によって「読まれる」、と記している。この状態に関して、中井久夫とラグーナ社員（精神障害者がともに働く就労継続支援A型事業所）の対話から生まれていった「中井久夫と考える患者シリーズ（全4巻）」の編集に携わっていた森越まや（2017）からの引用を次に記す。森越（2017）は「人を受け入れる笑いで包まれた「あいだ」の温かさについて触れ、統合失調症の急性期においても、「世界からまなざされ、語りかけられる体験」であるがゆえに、「語り合う相手が、判断や思惑のない、開かれた心で向き合うことは、患者が周囲の表情からどのように見られているかを思い煩うことなく、自分の正気を証明するという孤独な作業に陥らず、健康な部分を自覚し、「他者」とのつながりの糸を見つけることができるのではないか。」と述べている。

ろう者である齊藤陽道（2018）は「自身の声は口から出した瞬間に消えてしまう。聴者にどんなふうに届くのかもわからないまま発した音声のゆくえを相手の表情から読みとる」という描写で聴者とのやりとりを表している。相手に委ねるしかない自身の音声のゆくえは、自身の存在の不確かさ、心許なさを連想させる。我が身は、鏡という媒介物なしに全身を目で見て確かめることはできないにも関わらず、我が身を感じ身体感覚を意識できている。このことは不思議なようだけれど、普段は決して不思議なこととして認識されていない。

彼女は、発病時、中学生の頃、世界からまなざされ周囲の表情を思い煩い、温かみのある挨拶もできずに過ごす孤独な日常を生きていたのかもしれない。もう自分ではどうにもならない事態としか言いようがないだろう。統合失調症の発症時において、我が身を晒す生活世界において、己の身体と存在の連続性と確かさが揺るがされているときには、他者のまなざしから存在を読み取ろうとするのはある意味まっとうなことのようにも思われる。しかし、それは恐ろしいほどに心もとなく、そしてやるせない不条理を感じずにはいられない。

中井(2010)はこの時期における精神療法として、シュビング的接近の必要性を述べている。シュビング的接近を、中井は「治療者の身体性を、空無化した病者の身体の傍にそっと並べることから始める」と記している。症例アリス(シュビング 1940)にあるように、いつも同じ時刻に30分ほどベットサイドに赴き、アリスを脅かさず傍にそっと身を添えるような身体的な関わりである。この身体的な関わりを想像するとき、今回のインタビューで彼女が綴っていた**“「こんにちは」にこたえること”**の意味が新たに拓かれていくように思われる。挨拶というのは些細なささやかな日々の営みであり応答でありながら、そっと傍にいてことを許しあう関係の確認を意味するのかもしれない。挨拶という営みが、あなたと私の出会いへと、他者のまなざしを和ませる温かな営みへ誘うのかもしれない。

それにしても、彼女が綴る物語の中で幾度となく話題となった**“いつの間にか”**にまつわる経験は、示唆深いものであった。挨拶、死にたい気持ちのとき、ちょっとだけ頑張ればできる方へ、不安だけで動いてみる、水を飲むように薬を飲む、裏切らないように応えるなどなど。日常の営みに埋もれて気にも留めないような、自動化している営みすべてが、気がつけばぐるぐると回っている。これが**“いつの間にか”**暇してない生活だったり、不安が過ぎ去っていたり、おしゃべりになっていたりするというのだ。

病気や障害を抱える人へのケアの領域では、自身の病気を理解して意識して自身をケアできるように関わることは確かに重要なことであり定石であろう。しかし、もう一方で、彼女が綴っていたような**“いつの間にか”**生活がぐるぐるして回っていくというあり様、つまり、病気や障害を意識して生き抜こうとはしないことの方が、人生を生き抜くことになるのかもしれないという示唆になっているように思われる。より慎重な議論が求められるところではあると思うが、意識してないわけではないけど、意識せずに生きることの効用があるのかもしれない。

彼女が綴っていた物語には「皆さんのおかげで良くなったような気がして」という筋で、ケアの担い手である専門家を含む周囲の人すべてに向けた**“おかげさま”**が幾たびか登場した。物語が進行している最中は、同じ病気の人がいるところに行かなければよくならなかったと思うし、「くっちゃべるようになった」のも、きっかけは入院病棟のタバコ室だった、つまり専門家のいうことは大して役に立たず、屁理屈ばかりだとけなしていく筋になっていくのかと思うと、決してそうではなかった。今に至る糧となる専門家のアドバイスも彼女は心に刻んでいた。聴き手の私に遠慮をしたのかもしれない。彼女は、保護室の経験ですら淡々と静かに語り、その語気からは強く糾弾する勢いが感じられなかった。専門家はとかく意識的な生き方として、自立や主体性の確立・奪還をケアの目標に掲げたり、人生の物語のゴールにしがちである。しかし、もしかしたら、それだけではない生き抜きかたを彼女は示唆していたようにも思われるのだ。

最後に、**“ひたすらしょうがなしに「待つ」”**しかないときがあるという彼女の経験は、ケアの担い手としてどう受けとめたらよいのかを考えていきたい。少なくとも、ケアの担い手は、

ケアの受け手にしょうがなしに「待つ」ことを強要してはならないと私は考える。これを許してしまえば、パターンリスティックな関わりが許容され、最悪は、病状悪化が仕立て上げられていくような事態さえ招きかねないことを、彼女は指摘もしていると私は捉えたい。ここには、まだ答えを見いだすことができない。答えはないのかもしれない。ただ、ひとつ言えそうなのは、ケアの担い手もまた忍耐を持って、ともにしょうがなしに「待つ」こと、そして「あきらめないで、投げ出さないで、くじけない」で、先は読めないし不確かなままだけど、それでも必ずやってくる明日に希望をつなぐことを彼女は教えてくれているのかもしれない。

6. おわりに

本事例研究は、「「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく」第1報として記した。公表の場合は、他へも及ぶとは思いますが、今後、第2報、第3報と続けて報告することを最後に予告させていただき本稿を閉じることとする。

謝辞

本事例報告をまとめるにあたり、調査にご協力くださったにいちちゃんと NPO 法人精神障害者回復者クラブ「すみれ会」に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Gertrud Schwing (1940) EIN WEG ZUR SEELE DES GEISTESKRANKEN. Rascher Verlag. 関係はいかにして確立されるか. 精神病者の魂への道, みすず書房, 11-12.
- 葛西康子 (2006) 青年期を生きる精神障害者へのケアリング. 北海道大学出版会.
- 河野仁志 (1995) 精神障害者当事者組織の生成と展開の記録: すみれ会小誌 (1970-1994: 札幌). 北海道大学教育学部紀要, 65 号, 245-269.
- 松田康子 (2018) 精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する批判的検討. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132 号, 149-165.
- 森越まや (2017) やわらかなまなざしの中の対話-対話の一つの経験-. 精神療法, 第 43 巻第 3 号, 67-69.
- 中井久夫 (2010) 統合失調症状態からの寛解過程. 統合失調症 2, みすず書房, 30-31, 40.
- 齊藤陽道 (2018) 異なり記念日. 医学書院, 85.
- 山崎多美子 (2010) 山崎多美子さんからのロングインタビュー. HSK どっこい俺らも生きている パート 4-すみれ会 40 周年記念誌-, 11.

Abstract

This study presents a case study of a survivor's history to a Niichan who experienced mental health issues, trauma, and extreme states. I used informal interviews in this study. This case study focuses on the perspectives of caring to opened and recognized diversity by hearing a unique lived experience of each one. The findings revealed the following five meanings of lived experiences: awareness my illness in the gaze of others; responsibility such as Hello; unawareness; thanks to else; and wait patiently.